キール

タコ中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キール

【Ｎコード】
Ｎ２６７０Ｙ

【作者名】
タコ中

【あらすじ】
あるゲーム会社が作った体感型ゲーム「キール」に招待された主人公。
主人公はゲームをクリアーできるのか？

※主人公は一人とは限りません。

※この中で出てくる地名は本当に存在し、施設、建物も存在します。
（実際と少し違う可能性有り）どうか、ご了承ください。

体験１　招待（前書き）

最初はプロローグです。

体験1　招待

「ただいまーー。」
そう言って自宅に玄関を開けたのは、野々市の市内に住む田中　勇輝（たなか　ゆうき）だ。

「お帰り。」
と母がキッチンで晩御飯を作っている。
「なんか勇（勇輝のこと）あてで封筒来てたわよー。」と母が言う。
勇輝がリビングの机を見ると茶封筒がおいてあった。確かに宛名は勇輝になっている。

「珍しいな。」
と言いながら封筒を開けた。
中には一枚の紙と「特別ご招待券」と書いてある長方形のチケットが入ってた。

紙にはこう書かれていた。
「今回はＫＡＮＡＭＥが作りました「キール」の特別ご招待をさせていただきました。この「キール」は、体感型のゲームとなっており、実際にゲームの中でプレイしているような感覚が味わえます。プレイヤーは、自分自身となっており、コンピューターですぐさまプレイヤーの体力などをゲーム内にインプットします。ステージが石川県野々市市ということもあり、この度は一般体験前の完成プレイにご招待させていただきました。」

「おお～」勇輝は一人でいっている。
なぜなら、テレビでもこの「キール」は騒がれており、しかも体験

前に遊べるからである。
招待の日は日曜日ということもあり、
「母さん、なんか招待されたしいってきていい～？」
「いっていいよ。」と母はすんなり了承してくれた。

こうして、その週の日曜日金沢市の新しくできた、ＫＡＮＡＭＥ石川支社にタクシーで向かった。

体験１　招待（後書き）

野々市市は町から市になるので、ご了承ください。
もし、自分の家が出てきても怒らないでください。

体験２　説明

勇輝はＫＡＮＡＭＥ支社前に来た。支社の前には報道陣がたくさんにいた。

「今回体験する感想を！」

「選ばれた感想を！」

などたくさんのキャスターからインタビューを迫られたが、勇輝は無視して、ＫＡＮＡＭＥ支社に入った。

すると、

「勇輝じゃねえか！」

と言う声で一人の男が駆け寄ってきた。

「お！沢田じゃねえか！」

勇輝は覚えていた。中学校からの親友であるから。

名前は沢田　利哉（さわだ　としや）だ。

「勇輝と高校は別になってなかなか会えなかったけどここで会うとはな。」

「そうだな。」

しばし、二人は談笑していた。

「それにしても、ロビーだけでも広いな。」利哉がうらやましく言った。

「ああ、いいよな。」

勇輝も同じことを思った。

「そう言えば、今回なんで選ばれたかわかるか？」唐突に利哉が質問してきた。

「知らねーよ、そんなこと。」ぶっきらぼうに勇輝が答える。

「なぜなら…舞台が野々市じゃん。それで、このゲームのプレイ人数が２００人までなんだよ。そして、２００人っていえば、この野々市の中学校の一学年分なんだ。」
利哉が説明を始めた。
「それで？」勇輝も興味を持った。
「だから、パソコンでまず野々市にある二つのうちどっちの中学校か決める。そして、卒業年代をパソコンでランダムに決める。そして、この、高校一年になった俺たちが選ばれた。そういう分けよ。」
利哉の説明が終わった。
「なんで卒業生なんだ？」勇輝がきく。
「対象年齢高校だから。」当たり前のように利哉が言う。
「ああ、そーゆーこと。」勇輝は納得したらしい。
「んで、なんでお前が知ってんだよ。」
勇輝は返す言葉がなかった。

よく周りを見ると知っている顔ばかりだった。
「勇輝くーん。」利哉が変な呼び方をした。
「なんだよ。」と、勇輝が言う。
「ここには、俺らの年の卒業生が居るんだぜ。」ニタニタしながら、利哉は言う。
「だから、なに？」勇輝はいじっかしくなってきた。
「お前のコクったやつも居るんだぜ～。」利哉が言う。
勇輝は顔を真っ赤にする。
勇輝は2年の時に告白した女子がいる。学年でもかなりの美女だった。その人に告白してフラれた経験があるのだ。
「バカなこと言うなよ！」と勇輝が言う。
「怒った～こわ～。」と利哉がふざける。

すると、ロビーにある、大きめの自動ドアが開き、中から係員が出てきた。

「今回ご招待させていただきました皆さんはこちらに来たください。」

その声と同時に、ロビーでしゃべったりしていた人たちも立ち上がり自動ドアに向かった。

勇輝と利哉も向かった。

体験２　説明（後書き）

わからない部分もあったと思いますがご了承ください。
誤字脱字もあるかな。

体験３　また説明（前書き）

ようやく銃が出てくる～～

体験3　また説明

自動ドアに向かうと、係員が説明していた。
「これから、ゲームを始める準備をします。自動ドアの奥には、シャワールームのようなかんじに並んでいます。そのなかに椅子があるので座って待っていてください。」

そういうと、皆んなは、なかに入っていき、シャワールームのようなかんじになっていて、みんなは、一つ選び、座っていった。

「じゃあな。ゲームの中で会おうぜ。」利哉が椅子に座り言った。
「あぁ、わかった。」勇輝はそう言い、利哉の隣のシャワールームらしきところにある、椅子に座った。
椅子はマッサージチェア見たいでフカフカしていた。
向かいには、見たことあるけども、名前がわからない女子が座っていた。

数分後に係員がたくさん来て、一人一人に上から出したバイクのヘルメットを被せた。前には、さっきの女子がヘルメットをかぶっているのが見えた。
すると、アナウンスで、
「これよりゲームを始めます。詳しい説明はゲームの中で行います。それでは、いってらっしゃい。」
「いってらっしゃい」と同時に、意識がとんだ。

ふと目を開けると、知っている場所に座っていた。そこは、市が作

った、文化会館「フォルテ」の中にあるステージの観客席の前の方だった。

周りを見ると、知っている人がたくさんいた。

ポンポン

肩を二回軽く叩かれた。

「ここってゲームの中だよな。」利哉が聞いてきた。

「多分きっと……」勇輝は信じられないようだ。手や、足、など、現実世界とは変わらないものだったからである。

「デコピンしてくれないか？」利哉がデコを出す。

勇輝はデコピンをした。

「いたっ！……痛みまでリアルじゃねぇか。」

周りも信じられないような顔ををしている。

すると、ステージの上に女性が出てきた。

「どーもー、こんにちわ～。今回は「キール」をご利用いただきありがとうございます～。それでは、ゲームの説明をします。」

説明を始めた。みんなは、その説明を真面目に聞き始めた。

「この、ゲームは簡単。ただ、ゾンビから２４時間生き残ればいいだけ。」

ざわざわし始めた。

「はーい、静かに。」といい、手をパンパン叩いている。

みんなは静かになる。

「２４時間といっても、現実世界では２時間だから、安心して。」

みんなはホットしている。

女性は説明を続けた。

「今回の舞台は野々市市内のみ。そして、クリア条件は、５万体いるゾンビの全滅か、自衛隊が助けに来る２４時間後となります～。

そして、ゲームオーバーの条件は、ゾンビに噛まれてゾンビになるか、事故、自殺、殺害されるなどによる、死亡した場合になります。注目の武器ですが、日本で手に入る武器。あ、合法的にね。だけになるよ。だから、例えば、ショットガンだと、日本では3発以上入れたらダメだから、3発しか入らないよ。そーゆー訳です。」
これで説明が終わったと思いきや、まだ話す。
「ちなみに知っておくと便利なのが、まず、放置車両など全部に鍵がついてる訳じゃないよ。さらに、もちろん、駐車場に止めてある車はほとんど鍵がかかってるよ。まだ言うと、野々市市役所には自衛隊の一時的な基地が放置されているよ。どうやら、ゾンビに対抗しに来たようだけど、負けちゃったみたい。これで説明を終わります～。」
みんなは「ふ～」とため息をついた。
「あ、武器の使い方も説明しなきゃ。」
説明をしていた女性が忘れていたかのように話す。
このあと、武器の使い方も説明された。

「～～と言う訳でした。これで説明を終わります。みんな、後ろの武器庫から、好きな武器を選んでね。最初は、ハンドガン、上下二連式散弾銃のうち一つだけ選べないからね。あと、ハンドガンはマガジン3つ、ショットガンだと弾は20発だけだから。銃は交番とかにあったり、弾は、車の中とか民家の中にあるかもよ～。それじゃ、幸運を祈ります。」
そういうと、女性は消えた。

みんなは指示どうりに後ろに現れていた武器庫から好きな銃（ハンドガンとショットガン）を選んだ。
「お前なに選んだ　？」利哉が聞いてきた。
「ん？俺は上下二連式散弾銃」勇輝は上下二連式を利哉に見せた。
「あ～、俺と違うな。俺はハンドガンだぜ。多分これ、グロックか

な?」そう言って、ハンドガンのグロックを見せてきた。
「んじゃ、いこうぜ。」利哉が言う。
どうやら、勇輝と利哉がステージにいる最後らしい。
二人が出ると、駐車場でみんなはグループを何個も作り話していた。
正確に言うと、仲がいい人たちで固まっていた。もちろん、一人もいた。
二人は一番でかいグループに混じった。
すると、市内にアナウンスが響き渡った。

「スタート!」

体験3　また説明（後書き）

そんなに銃には詳しくないので、説明は省きました。
しかも、銃の名前もだいたいで、詳しくは書きません。
でも、いろんな銃を出していきます！

ってか、説明分かりにくいな。ご了承ください。

体験４　始まり（前書き）

なんか人物たくさん名前考えるの大変だな。

体験４　始まり

「スタート！」アナウンスが市内に響き渡った。

勇輝と利哉が今いるグループは、１５人程度の今出来ているグループでは、大きいグループにはいる。

他のグループは、５人だったり、一人だったりと様々である。

「……どうする？」一人の女子が言った。

「とにかく、移動手段が必要だな。」みんなはそれぞれ意見を言い始めた。

「そうだな。」利哉も納得している。

「そういえば、駐車場に止めてあるマイクロバスは使えねぇのか？」勇輝が言う。

「それしかないだろ。」利哉が同意した。

グループはマイクロバスに向かった。

ガチャガチャ

当たり前のように、マイクロバスには鍵がかかっている。

「割るか……」勇輝はそう言うと、上下二連式を降り下ろし、運転席の窓を割った。

ガシャン

運転席の割れた窓から、中の鍵を開けて運転席に勇輝が乗り込んだ。

「エンジンかけなきゃいけないから、ゾンビが来たら倒してくれ！」勇輝が言う。

反論するものもなく、勇輝はバスの運転席の配線をいじり始めた。

「来た！」一人の女子が言った。
みんなが見ると、そこには、十数体ものゾンビがこちらに向かって来ていた。
他のグループは一目散に逃げ出していった。
「よっしゃ！」３人ほどの男子がグロッグを構えた。

パンパンパンパン

放たれた銃弾は先頭にいたゾンビの頭を撃ち抜いた。
しかし、残りの弾は、後ろのゾンビの足や胴体に当たった。
「頭を狙え！」と男子が言う。

パンパンパンパンパン

銃弾が大量に放たれる。
しかし、頭にはなかなか当たらない。
「おい！田中！まだかからないのか！」男子が切羽詰まったように言っている。
「もう少しだ！」勇輝は配線をいじりながら答える。
女子もグロッグや上下二連式を構えて撃ち始めた。

パンパンパンパン

ドンドンドン

散弾を食らったゾンビの胴体に大きな穴が開く。

ドルン

「かかったぞ！乗れ！」
エンジンがかかったようだ。勇輝がみんなを呼ぶ。
先程まで戦っていた男女がバスに乗り込む。
「みんな乗ったな！いくぞ！」勇輝はバスのアクセルを思いっきり踏んだ。
バスは急発進をして、バスの前にいたゾンビを跳ね飛ばした。

ドン

グジャッ

バスのフロントガラスに血が大量についた。

「きゃあ！」
「うぉっ！」
驚く声が聞こえてくる。
バスは文化会館前交差点に出た。
そして、交差点のど真ん中で止まった。
「何で止まるんだよ！」男子が大声で勇輝に言ってきた。
「どこいくんだ？」と勇輝は質問した。
その男子は答えることが出来なかった。

「野々市中学校は？」一人の女子が言った。
その顔には勇輝は見覚えがあった。
中居　佐紀（なかい　さき）だ。
勇輝は佐紀と二回ほど中学の時、整備委員になっているからである。
「あそこなら、みんな覚えているはずだから……」佐紀は自信がないように言っている。
「……他に誰か意見あるか？」利哉が言う。
反論しようとするものは誰もいなかった。

「決定だな。」そう言い、勇輝はバスを走らせた。

体験４　始まり（後書き）

男子とか女子で済ませている人はちょい役だと思う。
（名前考えるのめんどくさいだけです。）

体験5　事故（前書き）

長く続くかな？

体験5　事故

二台のブルドーザーがゾンビを蹴散らしながら進んでいる。
「最高だぜ！」
「あぁ、全く持ってだ。山下」
そう言っているのは、山下と坂下である。
中学の時は、とても仲が良かった。

「なぁ、武器でも調達しねぇか？」坂下が言う。
二人は工事現場から無線機とブルドーザーを拝借していたのである。
「そうだな。いい加減飽きてきたな。」と山下も言う。
「ってか、武器ってどこにあるんだよ。」山下が問う。
「お前説明聞いてなかったのかよ。市役所だよ。し・や・く・しょ。」嫌みっぽく坂下が言う。
「そうだったな。今から行くのか？」また、山下が問う。
「先いかねぇと他のやつらに持っていかれちまうじゃねえか。」坂下が当たり前のように言う。
「んじゃ、いきますか。」山下が言うと、二台のブルドーザーは市役所に向かった。

二台のブルドーザーは市役所正面についた。
市役所の駐車場には、自衛隊の特有の緑のテントが並んでおり、軍事車両も大量に停めてあった。
「なぁ、一応ぐるっと市役所一周しようぜ。」坂下が提案する。
「そうだな。一応な、一応。」そう言うと、山下が時計回り、坂下が反時計回りで回ることにした。
「……ゾンビがいねぇな。」市役所の周りの４分の１位まで来たところで無線から声が聞こえた。

「……なんだ……あれ……」坂下が怯えた声を出している。
「どうした！」坂下から応答がない。
すると、
「うわぁぁぁぁ！くっ……来るな！来るなぁぁぁぁ！」尋常じゃない声が聞こえた。
「どうした！おい！答えろ！」
坂下からは全く音も聞こえなくなった。
「クソッ！」そう言うと、山下は来た道を戻り、坂下のもとへと向かった。

市役所の正面に来たとき山下は驚きを隠せなかった。
「……なんだあいつ……」
目の前には3メートルほどあるがたいの良い巨大なゾンビがいた。
すると、おもむろに、近くに置いてある、運転席がメチャクチャになったブルドーザーを持ち上げた。
「あいつ……まさか…」山下の読みは当たっていた。あの運転席がメチャクチャになったブルドーザーは坂下が乗っていたものである。
そして、山下がハッとして目の前を見ると、ブルドーザーが目の前に飛んできていた。

勇輝達は、バスでゾンビを跳ね飛ばしながら大通りを突き進んでいた。
「不味い！前が見えねぇ！」勇輝の目の前のフロントガラスは血がベットリ付いていた。ワイパーを動かすが、全く意味がない。

ガシャン！
放置車両に当たった。
後ろからは、悲鳴と叫び声が聞こえる。

「おい！止めろよ！」男子が叫ぶ。
しかし、勇輝がバスのブレーキを踏んも止まらない。
ゾンビを踏んだときについた血油のせいである。
「ヤバい！コンビニに突っ込む！」勇輝は確信が持てた。
「みんな！かがめ！」利哉の声と同時に一軒のコンビニにマイクロバスは突っ込んだ。

ガシャァァァン

「いってー。……みんな大丈夫か？」勇輝が確認する。
バスは突っ込んだ衝撃で、前部分はメチャクチャに壊れてしまってる。
（生きてるのが、奇跡だな。）勇輝はつくづく思った。
特に怪我人はいなかったが、バスは使えなくなってしまった。
どうやら、消防署横にあるコンビニに突っ込んだようだ。
「ああ、大丈夫だ。」男子が答えた。
「早くいくぞ。ゾンビどもが群がってしまう。」冷静に利哉は言う。
マイクロバスの真ん中のドアをこじ開けて出ると、見えるだけで、２０以上はゾンビがいた。
バスから全員が降りて、銃をかまえた。
徒歩で野々市中学校に向かうことにこのグループはなった。

体験５　事故（後書き）

急展開多すぎるような……？

体験６　犠牲者（前書き）

ドンはショットガンを撃った音
パンはハンドガンを撃った音です。

体験6　犠牲者

ドン

勇輝が持っていた、上下二連式が火をはなった。すると、前にいた2体のゾンビが吹っ飛ぶ。
他の人達も、自分が持っている銃をゾンビに向かって放つ。

パンパンパンパン
ドンドンドンドン

「キリがねぇ！」利哉がヤケクソぎみに言う。
このグループは今、野々市中学校に向かっている。
しかし、乗っていたバスが事故で使えなくなってしまい今はゾンビを倒しながら進んでいる。
「クソッ！多すぎるぞ！」男子が言う。
「いいから進むんだ！」他の男子が励ます。
しかし、ゾンビ達はどこから沸いて出てくるのか疑問なほどに、止めどなく出てくる。
すると、
「キャァァァァ！痛い！」女子がグロッグ（ハンドガン）をリロードしている隙に腕を噛まれたようだ。

「痛い！痛い！痛い！」そう言いながら、噛まれたところを押さえながら倒れて悶え苦しんでいる。よく見ると、肉を食いちぎられている。

「早奈英！？早奈英！」そう言って、一人の女子が噛まれた女子に駆け寄っていく。どうやら、噛まれた女子は早奈英（さなえ）と言

うらしい。
その間も早奈英は食いちぎられたところを押さえて、
「痛い！誰か！痛い！死ぬ！」と叫んでいる。
周りのゾンビがかなり少なくなってきたところで、勇輝が
「離れろ。そいつはゾンビになっちまうから……」と言う。
気がつくと、ゾンビはあと1体くらいしか見えない。
そして、早奈英も静かになっている。
「さ……な…え？」と寄り添っていた女子が言う。
すると、

ガブッ

早奈英は寄り添っていた女子の喉に噛みついた。女子からは鮮血が吹き出す。
先程までいた残り1体のゾンビも男子の持っている上下二連式散弾銃で頭を吹っ飛ばされた。その男子も早奈英達の方を向く。そして、驚愕を隠しきれなかった。
先程まで一緒に行動を共にしていた女子がゾンビとなり、親友であろう人を喰らっているのだ。
早奈英であったゾンビはあらかた食べると、着ていた服を血みどろにして、
「新しいエサだぁ」と言わんばかりのように、ゆっくり立ち上がりこちらに向かってゆっくり歩いてくる。
そして、後ろでは、早奈英であったゾンビに食べられた女子もゾンビ化していた。
勇輝は上下二連式散弾銃を元早奈英に向けた。

「……ゴメン」

ドン

散弾は胸から上を吹き飛ばした。
勇輝は素早くもう一人のゾンビに銃口を向けて撃った。

ドン

今度は頭が吹き飛んだ。
「……行こう。」利哉がそう言うと、みんなは野々市中学校に向かって再び歩き出した。

体験６　犠牲者（後書き）

……ちょっと泣けてきた。

体験7　武器調達（前書き）

詳しい銃の名前わかんねー。

体験7　武器調達

野々市中学校に近づくにつれて学生服やセーラー服を着たゾンビが多くなってきた。

「弾がねぇぞ！」男子が言う。

「こっちもだ！」他の男子が言う。

すると、勇輝は上下二連式散弾銃（ショットガン）の銃身の方を持ちゾンビの頭めがけてバットでスイングするようにして上下二連式をふった。

グシャァ

鈍い音とともにゾンビが力なく倒れた。

「こうすれば良いんだよ」勇輝が言う。

上下二連式を持っている人は勇輝の真似を始めた。

グロッグ（ハンドガン）を持っている人は、鉄パイプや、レンチ等を民家などから拝借して戦った。

みんなは服を血みどろにして必死に戦っている。

そして、ようやくのことで野々市中学校の正面玄関に来た。

「……やった！」喜びをみんなは隠しきれない。

ゾンビを蹴散らしながら正面玄関に入っていく。

「どこいくんだよッ！」利哉が学生服を着たゾンビを鉄パイプで殴りながら聞いてきた。

「体育館でよくね？」男子が言う。

体育館の扉は鉄で出来ており侵入経路も少ないのである。

みんなは迷いなく、体育館に向かう。

体育館に入ると、何もない広い体育館のはずが、箱などが何故か沢

山置いてある。
しかも、ゾンビがそんなにいない。

ガシャン

入ってきた扉を最後に入ってきた男子2名が閉めた。
「おい！シャッターも閉めろ！」扉を閉めた男子が言う。
体育館は2階にある卓球場と繋がっている。しかし、卓球場も扉は鉄で出来ている。
体育館の扉を閉めた男子と別の男子が閉めに行った。
しばらくして、ガシャンという鉄の扉が閉まる独特の音がした。

「……なにこの箱？」佐紀が不気味そうに言う。
佐紀が恐る恐る箱を開ける。
中には、ショットガンの弾が入ってた。
「弾じゃん！」男子が嬉しそうに言う。
そして、横の箱を開けると、サブマシンガンが入ってた。
「おぉ！ＭＰ５じゃん！」一人の男子が目を輝かせた。
「…誰？」勇輝が聞いた。
「覚えてないのかよ。一緒に中学の時サバゲーしたじゃんか。佐藤武（さとう　たける）だよ。」ホントに？という顔をしている。
「……覚えてないや。」勇輝は必死に思い出したが思い出せなかった。
とにかく、この場にいた人は、武がガンオタクということだけは確実に分かった。
他の箱には警察の特殊部隊が使うような武器とグロッグの弾が出てきた。
さらに、水平二連式散弾銃、ポンプアクション式散弾銃まで出てきた。

ガシャァァァン

鉄の扉にゾンビが体当たりを始めた。しかし、全く持って体育館の扉はびくともしない。

「大丈夫だな。」利哉が言う。

そして、おもむろに近くの箱を開けた。

中には、手榴弾が１０個ほど入ってた。その箱が、５箱位近くにあった。

周りからどよめきが聞こえる。

「武器には困らないな。」男子が言う。

「そうね。」女子が言う。

その時、先程までゾンビが体育館の扉を叩いてた音が止んだ。

「……なに？」女子は怖がっている。

すると、市内中にどこにいても聞こえる程の大音量のアナウンスが鳴り響いた。

「残りの生存者１００人切りました。」

体験７　武器調達（後書き）

いい加減「男子」「女子」だとわかんなくなるな。
でも、１０人も名前考えれない……
どうしよう。

体験８　思い（前書き）

読んでくれている人ありがとー。

体験８　思い

「残りの生存者１００人を切りました。」

そのアナウンスにほとんどの者が驚きを隠せなかった。

「何でだよ！まだ４時間もたってないんだぞ！」利哉の言う通りだった。このゲーム「キール」はゲームの中の時間では９時から始まっていて、今、勇輝達が避難している野々市中学校の体育館の時計は１２時４８分をさしていた。

「……みんなゾンビになったのかな？」佐紀が言う。

「……そうかもな。」武が答える。

「そんな……！」佐紀が落胆する。

ガシャァァァン！

アナウンスが鳴っていたときは止まっていた、ゾンビが体育館の鉄の扉を叩く音がまた始まった。

「…逃げた方が良さそうだな。」勇輝が言う。

その声を聞き、体育館にいた人達はそれぞれ武器をとった。

１００人を切った時間が早かったのはゾンビだけが原因ではない。

～３時間前～

御経塚イオンには、沢山の人達が逃げてきている。ここのイオンの中の防火扉などはどれもかもが閉められており、立て籠るにはうってつけの場所だった。
「…大丈夫かな？」怖々しく言っているのは、藤林　幸子（ふじばやし　ゆきこ）だ。
「うるせぇーな！」そう言って幸子を罵っているのは、志野木　亜美（しのぎ　あみ）で、現実世界でも幸子を仲間をつれて集団でいじめている。
「なぁ、幸子さんよぉいざとなったらあんた餌になってくれるよな～？」亜美が優しく言う。
「……はい。」弱々しく幸子が答える。
周りではその光景を見ている人たちがいる。みんなは「自分じゃなくてよかった。」など、「こっちに関わるな」という感じの目で見てくる。
今、このイオンに逃げてきている人達は最初はすごい団結力でバリケードなどを作っていたが、作り終わり安全が確認されると、みんなは静かに座ったり、眠っていたりするようになっていた。
しかし、なにもできないことや、いつ襲われるかわからない恐怖にみんなは耐えていた。
亜美達はストレス発散のために現実でもいじめていた幸子をいじめ始めたという訳である。
「あんたなんか、このゲームでは、いい餌役だよね。」亜美達は笑いながらいっている。そして、逆らうなと言うかのようにグロッグ（ハンドガン）を持っている。
「ちょっとトイレ行かして……」幸子は恐る恐る聞く。
「行ってくれれば。ってか、あんたなんかいなくても良いし。」と亜美はぶっきらぼうに言う。
幸子は完全に封鎖されている御経塚イオンの2階トイレに行った。
電気はついているので暗いことはなかった。
トイレの鏡を幸子が見たときに幸子はつぶやいた。

「なんで……私ばっかり……」自然と幸子の涙が頬をつたった。
そして、腰に差してあるグロッグをトイレの洗面台に置いた。
そして、ふと思った。

「……ゲームの中なら、殺してもかまわないよね……」
そうつぶやくと、洗面台に置いてあったグロッグをとって、トイレを出て亜美達や他の人たちもいるイオンないにある映画館へ向かった。

体験８　思い（後書き）

なんか、時間が戻ってごめんなさい。
あと、誤字脱字があったら、ごめんなさい。

体験９　狂気（前書き）

今回は書いてる自分でも酷いと思うな……

体験9　狂気

幸子はグロッグ（ハンドガン）を持って亜美達のところへ向かった。
「帰ってきたの～？別に死んでてもいいのに。」笑いながら亜美が言う。

「……いい加減にして…」幸子は小さい声で言った。
「はぁ？今、なんか言ったよね？」亜美の隣にいた女子が突っ掛かってきた。
「……もう…殺してやる」幸子は亜美達に聞こえるように言った。
「プッ……アハハハハハ！」亜美達は爆笑している。
「あ～、腹痛、あんたが、私達を殺す？出来ないのになに言ってんの」腹を抱えながら亜美は言う。

パン

「キャァァァ！痛い！」突然亜美の隣にいた女子が足を押さえながら倒れた。
目の前には、グロッグを構えた幸子がたっていた。
周りでは幸子を見て逃げ出す者もいた。
「え……嘘でしょ……」亜美は信じれないようにその場にへたり込んだ。
「大丈夫。貴方は最後にしてあげるから。」冷たい目で幸子は優しく言う。
そう言うと、足を銃で撃たれて押さえながら痛がっている女子の頭に幸子はグロッグの銃口を向けた。

パン

幸子は表情をひとつも変えずに頭を撃ち抜いた。
頭を撃ち抜かれた女子はピクリとも動かなくなり、大量の血が床に広がっていっているのが一目でわかる。
亜美は腰が抜けて、声も出せずにいた。
幸子は表情を変えずにさらに横にいた亜美達と一緒に幸子をいじめていた女子に向かって再び銃口を向けて撃った。

パン

またもや、頭を撃ち抜いた。
壁に大量の血が飛び散る。亜美にも少しかかる。しかし、亜美は恐怖の表情を変えない。
「……お願い……やめて……今までの事は謝るから……だから…お願い…殺さないで…」亜美が説得するが幸子は聞く耳を持たない。
幸子は亜美に銃口を向ける。
「……やめて…お願い…」亜美の声が震える。
すると、後ろから
「やめろ！」という声が聞こえた。
幸子が振り向くと、男子が数人グロッグや上下二連式散弾銃を幸子に向けている。

しかし、幸子は表情を変えず、さらに、

パンパンパンパンパン

次々と銃を構えていた男子がスローモーションのように倒れた。
そして、ピクリとも動かなくなった。
幸子は辺りを見回した。亜美は相変わらず腰が抜けている。
すると、２階の映画館の隅っこに女子が１０人ほど固まっていた。
みんなは体を小さくしてみんな寄り添い固まっていた。

幸子はおもむろに2つのポケットからカセットコンロで使うようなガスボンベ2本取り出した。そして、隅っこに固まっている女子たちに向かって投げた。

パンパン

幸子はガスボンベをグロッグで撃ち抜いた。

ボン！

ガスボンベは2本とも女子たちの頭上で爆発を起こした。
そして、女子達はその爆発に巻き込まれ見るも無惨な姿で死んだ。
幸子はそれでも表情を変えずにその見るも無惨な姿を見ていた。
もう、このフロアには生きているのは幸子と亜美だけになった。
幸子は腰が抜けて立てない亜美の前に来た。亜美は幸子に向かって
「化け物……」とつぶやいた。
その後すぐに亜美はグロッグを素早く取り出し、幸子に向けた。
「調子に乗るなぁぁぁぁ！！」亜美が叫ぶ。

パン

「ーーーーっ！」
撃たれたのは亜美だった。素早く取り出したのだが、幸子はそれより早く出していた。そして、亜美の手を撃っていた。
亜美は撃たれた手を押さえて苦しんでいる。
「手が……痛いよぉ……」
それを見て幸子は笑った。声を出して
「アハハハハハハハ！」そして、亜美に銃口を向ける。

パン

亜美の右足を撃った。

パン

今度は左足を、

パン

左腕を、

パン

右腕を、

亜美の意識は消えかかっていた。

幸子は亜美の右腕の傷口をグロッグの銃口をグリグリ押した。

「ギャァァァァ！！」亜美は絶叫する。

それを見て幸子はまた笑った。

そして、

「……飽きてきちゃった。」と幸子はつぶやいた。

グロッグの銃口を亜美の額に当てた。

「現実世界で今度いじめたら、これより辛いことするからね。」そう優しく言うとグロッグの引き金を引いた。

パン

幸子は動かなくなった亜美の死体を見て「フッ」と鼻で笑うと御経塚イオン3階の駐車場に向かった。

体験９　狂気（後書き）

……みんなは真似しないでね。

体験１０　動き出す（前書き）

あんまり頻繁に更新できませんのでご了承ください。

体験１０　動き出す

幸子は殺した人たちから弾や、上下二連式散弾銃を拝借して３階の駐車場いた。
駐車場も閉鎖されており、ゾンビは一体もいないが、封鎖してある金網のシャッターには数体ほどたむろしている。
幸子はまず先に鍵のかかっていない車を探し始めた。
そして、一台の軽トラックに鍵がかかっていなかった。軽トラックの荷台には、農作業でもしていたのか木箱のなかに大型のチェーンソーが入っていた。チェーンソーはガソリンで動くタイプで、チェーンソーの中にはたっぷり入っていた。
そのチェーンソーを徐っ席にのせゾンビが集まっている金網のシャッターに向かった。そして、上下二連式散弾銃を構え、撃った。

ドンドンドンドンドン

至近距離で散弾を食らったゾンビは大きな風穴を開けて力なく倒れていった。そして、倒しきると、横にあるシャッターの開閉装置に向かい、シャッターを開けた。
幸子は軽トラックに戻ると軽トラックのエンジンをかけた。
「……次はどこにいこっかな♪」幸子は軽々しく言った。
幸子は完全に“生きている人”を殺すのが楽しみとなってしまっていた。
軽トラックは御経塚イオンの３階駐車場を勢いよく出ていった。

一方、野々市中学校の体育館で籠城していた勇輝達は逃げ出すことにしていた。
「……どうやって逃げるんだ？」武が聞く。
「扉の向こうはゾンビで一杯だぞ。」利哉が言う。
「それに誰が開けるんだよ。」ほかの男子が言う。
佐紀がいい始めた。
「扉を一人分だけ開けて一体ずつ倒していけば？それと、行きなり外に逃げてもいいんじゃない？」
「……。」みんなは無言になる。
「なんか変なこと言った？」佐紀が聞く。
「それしかないだろ。」そう言ってみんなは座っていたが、立ち上がって円陣を組始めた。

「んじゃ、いくぞ！」利哉が言う。

「おおーー！」みんなが声をそろえて言った。

体験１０　動き出す（後書き）

次はいつになるかな……

体験１１　謎の女子（前書き）

頑張って書いてます。

体験１１　謎の女子

野々市中学校では脱出するために一致団結していた勇輝達だが、今はどこの扉から逃げるので迷っている。

「どこから逃げるんだよ？」利哉が聞く。

「どこって……扉からじゃん。」当たり前のように他の男子が答える。

「いや、そうじゃなくてどこの扉から逃げるんだよってこと。」利哉が捕捉した。

「……。」男子は黙ってしまった。

「やっぱりゾンビが少ない扉からじゃない？」佐紀が言う。

「どうやって調べるんだよ。」利哉が聞く。

「簡単じゃない。ゾンビが扉を叩いてるからその音で判断するのよ。」利哉は納得した。

扉を調べることになった。

体育館は全部で６つの扉があるが、学校内に通じる扉はたくさんのゾンビがいることはすでに分かっていた。

あとは、駐輪場側の扉２つかグラウンドに通じる２つの扉の４つだった。

駐輪場側の扉はそれなりの数が扉を叩いてることがわかった。

しかし、なぜかグラウンド側の扉には１体もいないことが判明した。

「……何でいないんだ？」勇輝が気味悪いように言った。

「いいじゃんか、その方がいいだろ。」一人の男子がおもいっきり扉を開けた。

「まてっ……？」勇輝は遅かったと思ったが、グラウンドには

本当に1体もゾンビがいなかった。
みんなは一斉に体育館から脱出した。
そして、1人の男子が気づいた。
「グラウンドの真ん中誰かいないか？」気づいた男子が言う。
「ホントだ。誰だ？」武が不思議がっている。
「…あいつ、ゲームを始めるとき俺の前に座ってた奴だ！」勇輝が思い出したように言う。
「おーい！こっちに来いよ！」大声で男子が言う。
すると、
ドス
「がっ……！！」大声で勇輝の横で呼んでいた男子が呻き声を上げた。
その方を見ると、グラウンドの真ん中で立っていた女子がその男子の腹に長い刺身包丁を突き刺していた。そして、その刺身包丁は男子の腹を貫通して背中から包丁の先の方が出てきていた。
「え……」その場にいた人達は信じられないといった表情をしている。
それもそうである。女子が立っていたグラウンドの真ん中から体育館の扉まで軽く１００ｍくらいはあるはずなのにそれをものの２秒もかからずに来たからである。
「う……動くな！」その場にいた男子が声を荒げた。そして、体育館入手したＭＰ５を女子に突きつけた。
しかし、その女子は息絶えた男子から刺身包丁を抜くと刺身包丁をＭＰ５を突きつけている男子に投げた。
ドス

「ギャァァァァ！！」右足の太ももに刺さった。男子は倒れ込んだ。
「みんな！散らばれ！」誰がいったか分からないがみんなはグラウンド内に散らばった。
狂暴な女子（刺身包丁を振り回していた女子）は刺身包丁を回収せずに腰から振ると長くなるような3段式の警棒を2本出して振って伸ばした。

ジャキッ

そして、あり得ないほど早い足でグラウンドの車両等が入れられるところから逃げようとしている男子と女子のところに行った。

「キャッ！」
「うぉっ！」
2人は突然現れた狂暴な女子に驚いてる。
「くそっ！化け物が！」そう言って男子はグロッグを向けた。
しかし、狂暴な女子は急に飛び上がった。その高さは2mは軽くあっただろう。そして、空中で警棒を振り上げ落下する速度も加えて男子の頭めがけて降り下ろした。

グシャァ

スイカの割れるような音のあとに男子が倒れた。
「やめて……お願い……殺さないで……」女子は腰が引けて動けない。
しかし、狂暴な女子はその言葉を無視して警棒を振り上げた。
（こ……殺される！）と女子が思たときだった。

グォォォォォォ

ドン

キキッ

軽トラックが狂暴な女子を跳ね飛ばし止まった。軽トラックは、グラウンドをならす時に使われる軽トラックだった。

女子は呆然としている。

すると、軽トラックのパワーウィンドウが開き、中から勇輝が叫んだ。

「荷台に乗れ！」

荷台には他の体育館から脱出したメンバーが乗っていた。

その女子は勇輝の言う通りに軽トラックの荷台に乗った。

そして、軽トラックは野々市中学校のグラウンドを出た。

体験１１　謎の女子（後書き）

なんか知らないけど軽トラックが異様に出てくるな。

体験１２　第二の事故（前書き）

漢字でどちらか迷った漢字は平仮名で書いてます。

体験１２　第二の事故

勇輝が運転する軽トラックには荷台に乗っている人も合わせれば８人しかのっていなかった。
「どこいくんだよ？」徐っ席に乗っている利哉が聞く。
「野々市市役所に決まってるだろ。」勇輝が放置車両をかわしながら言った。
「あそこには自衛隊が基地作っていたんだろ。それならこんなボロい軽トラじゃなくて装甲車とか乗りたいな。」勇輝が言った。

ドン

道の真ん中にいたゾンビを跳ね飛ばした。軽トラックのフロントガラスの右下の端に蜘蛛の巣のようなヒビが入る。
「ほら。」勇輝が言う。
「わかった。大体もうつくじゃねぇか。」ため息をつきながら利哉が言う。
そして、２人の会話が終わったとき佐紀が叫んだ。

「あの女子が追いかけてる！」
勇輝はサイドミラーを見た。確かに、６０ｋで走っている軽トラックを追ってきている。
「もっとスピード出せよ！」後ろの荷台に乗っている男子が言う。
「無理だ！これ以上スピード出すと放置車両をかわせねぇ！」勇輝が反論した。
「むぐっ……」男子はハンドルを握っているのは勇輝なのでそれ以上はなにも言えなかった。
「市役所だ！」利哉が言う。
市役所が見えてきた。

その間もドンドン狂暴な女子と軽トラックの間合いは詰められていく。
勇輝がサイドミラーを見ていると、利哉が大声で言った。
「前！勇輝！前みろ！」切羽詰まっている。
勇輝が前を見ると大破した2台のブルドーザーが前方の道を塞いでいた。
「うわぁぁぁぁぁぁ！」慌てた勇輝はハンドルを右に切る。
軽トラックはブルドーザーをギリギリかわしたが、今度は市役所の前にあるそこまで大きくないロータリーを突っ切り正面玄関にスピードを緩めず突っ込みそうになる。
勇輝はブレーキを踏み、サイドブレーキを上げた。
しかし、荷台に乗っている人達は頭をかばうような姿勢をとっている。
ブレーキ音が響く、

ガシャァン

ドン

軽トラックは正面出入り口の自動ドアを突き破り受け付けに突っ込んだ。
そして、軽トラックから降りて利哉と勇輝は、
「お前事故り過ぎだ！」利哉がキレる。
「うるさい！お前運転できないだろうが！」勇輝も言い返す。
「知らねーよ！俺ら高一だぞ！運転できる方がおかしいだろ！」利哉がさらに言い返す。
「別に出来ても……」勇輝がまた言い返そうとしたときだった。

タタタタタタ

先程助けた女子がＭＰ５を天井に乱射した。
利哉と勇輝は唖然としていた。
「ケンカするならゲーム終わってからにして！これ以上するなら殺すよ！」そういいながらＭＰ５を向けてくる。
「はい……」利哉と勇輝は同時に返事した。

「来たぞ！」男子が叫んだ。
狂暴な女子は市役所の前のロータリーに立っていた。そして、ロータリーに止めてある“野々市市役所”と横にステッカーが貼ってある白いよく業務用として使われる普通乗用車に向かった。
そして、しゃがんだ。

「まさか……逃げろ！奥に逃げろ！」武が叫んだ。
「何で？」上下二連式散弾銃を構えた勇輝が言う。
狂暴な女子は市役所の普通乗用車を持ち上げ、頭の上に掲げた。
すると、受け付けに突っ込んだ軽トラックの周りにいた人達は顔色を変えた。
「逃げろ！」武が叫んだ。
みんなは、市役所の奥へとバラバラに逃げていった。
そして、狂暴な女子は市役所の普通乗用車を市役所の正面玄関に向かって投げた。

体験１２　第二の事故（後書き）

また事故ったな。

体験１３　仲間割れ（前書き）

眠い

体験１３　仲間割れ

ガシャァン！

狂暴な女子は普通乗用車を受け付けに突っ込んでいる軽トラックめがけて投げて軽トラックに当たった。

「不味い！逃げろ！爆発するかも知れねぇ！」武が叫んだ。
市役所はコの字型で、市役所のなかを一周することは出来ない。しかし、みんなは、そのまま真っ直ぐ突き当たりへと進んでいく。
「おい！行き止まりだぞ！」男子が叫んだ。
勇輝が後ろを見ると、軽トラックに狂暴な女子が投げた普通乗用車があたって二台とも大破して燃えていた。
そして、ゆっくりと狂暴な女子が歩んでくる。
「出口はなしか……」一人の男子がそう諦めながら言った。
「諦めんな！」そういいながらＭＰ５を利哉は狂暴な女子めがけて撃った。

タタタタタタ

狂暴な女子は冷静に、ロビーのソファーを掴み、立てた。そう、盾の代わりにしたのだ。
「くそっ！」利哉は撃つのをやめた。
皆が、諦めかけた時だった。

ガシャァン

突如３ｍはあるがたいの良いゾンビが中庭からガラスをわって入ってきた。

「これは確実に詰んだな。」武が言う。
すると、目の前で衝撃の事が起こった。
なんと仲間同士であるはずの狂暴な女子と３ｍもあるゾンビが向き合っているのだ。

すると、３ｍあるゾンビが右の拳を上げた。

体験１３　仲間割れ（後書き）

短いけど勘弁してください。

体験１４　勝敗（前書き）

誤字脱字は勘弁してください。
あと、市役所がわからない方は、Ｇｏｏｇｌｅマップか Ｙａｈｏｏ！のマップの衛生写真で「野々市市役所」か、「野々市町役場」でわかります。

体験１４　勝敗

大きなゾンビ（３ｍ位あるがたいの良いゾンビ）は振り上げた右の拳を降り下ろした。

ズゥゥゥゥン

しかし、狂暴な女子はその降り下ろされていた右の拳を両手で受け止めていた。

「グァウ！？」

大きなゾンビは予想外の事に驚いている。

大きなゾンビは左手に拳を作り、地面に擦りながら狂暴な女子めがけて降った。

しかし、左手の拳は何にも当たらない。

大きなゾンビが混乱していると、

ドスン

大きなゾンビの左肩から先が切りをとされていた。

狂暴な女子は大きなゾンビの後ろにいた。そして、どこから持ってきたのかわからない日本刀の血を振り払った。

「何が起きているの……？」この戦いを見ていた佐紀が言う。

「……分かるわけないだろ。」利哉が言う。

追い詰められていた勇輝達はポカーンとこの戦いを見ている。

大きなゾンビは一旦中庭に出た。

ガシャァン！

またガラスを割った。

中庭に止めてある装甲車に向かった。
そして、中庭に止めてある装甲車を大きなゾンビは持ち上げた。
そして、狂暴な女子めがけて投げた。

ドシャァン！
投げられた装甲車は狂暴な女子がいたところに命中した。
しかし、そこには狂暴な女子はいなかった。
狂暴な女子は大きなゾンビの両方の膝を切っていた。
そして、またもや血を振り払ったら、さや（剣をしまうやつ）にしまった。
大きなゾンビが倒れる。

ズゥゥゥゥン

「う……嘘だろ……」男子が言う。
「あのデカブツを倒した……」勇輝も言う。
狂暴な女子は勇輝達の方を向いた。
「無理だ……勝てねぇよぉ。」勇輝が弱々しく言う。
そして、狂暴な女子は剣を抜いた。
そして、ゆっくりと狂暴な女子は勇輝達の所へと歩いてくる。
その時、死んだはずの大きなゾンビが右手で狂暴な女子を掴んだ。
そして、投げた。

ガシャァン！

狂暴な女子は大きなゾンビに勇輝達とは向かい側の方に投げられた。
大きなゾンビは動かなくなって、狂暴な女子は向かい側の市役所の建物が衝撃で倒壊して下敷きになっている。
「今だ！自衛隊の武器を取りに行くぞ！」武が言う。
そのチャンスをみんなは逃さなかった。

そして、市役所の駐車場の自衛隊のテントに勇輝達は向かった。

体験１４　勝敗（後書き）

戦闘シーン大変

体験１５　強力な武器調達（前書き）

今回は一人の暴走だな

体験１５　強力な武器調達

勇輝達は正面玄関から外に出た。
大破して燃えていた２台の自動車の火は弱くなっていて難なく横を通りすぎることができた。

「ゾンビがいない……」佐紀が言う。
佐紀の言う通りゾンビは見渡す限りいなかった。
「先行って良い？」武が言う。
「はいはい、いけば良いだろ。」勇輝がぶっきらぼうに言う。
武は市役所の横にある駐車場に向かった。
そこには、自衛隊の独特な深緑色のテントが並んでいた。
テントには武器はないが通信機器や、ホワイトボードがあった。ホワイトボードには野々市の地図が貼ってあった。
他のテントは、治療でもしていたのかベットが並んでいて、ベットには少しだけ血が付いていた。
さらに奥に進むと、自衛隊の車両が大量に停めてあった。
「うぉぉぉ！これは！軽装甲機動車！中には……」武が装甲車のドアを開けた。
「おぉ！これは！７４式車載　７．６２ｍｍ機関銃じゃねえか！」武が目を輝かせて言う。

「誰か止めないの？」佐紀が言う。
しかし、みんなは首を横に降った。
「ゾンビもいないんだし、大人しく聞いてやろうぜ。」利哉が言う。
さらに、武は言う。
「横には！スゲェ！まだ６台ほど停めてある！」
「他には……ぬぁぁぁ！１／２ｔトラック　じゃないか！三菱のパジェロがモデルなんだ！さらに横には、７３式大型トラッ　クだぁ

ー！」

「すごい嬉しそうだな。」勇輝が言う。
「当たり前じゃないか！」すごい笑顔を武が見せた。
「……そうか…それならよかった。」勇輝はもうついていけないようだ。
「そして、トラックの中には…」武は７３式大型トラックの後ろに回った。
「武器だぁー！」武が叫ぶ。
「マジ！？」皆が駆け寄る。
そこには、８９式小銃や６４式小銃、さらにはＭ４カービンまであった。
弾もそこそこある。
「おぉ！これで武器には困らないぞ。」男子がＭ４カービンを手に取りながら言う。
武が突然叫ぶ。
「あそこには！９０式戦車と１０式戦車がぁぁぁ！」
皆が見ると市役所のごみステーションの目の前の駐車場にそれぞれ２台のずつ停まっている。
「操縦できるのか？」利哉が武に聞く。

「出来ない。」武が当たり前のように言う。
他の大型トラックには、コルトガバメントや、警官が持っているようなＳ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ３７まで手には入った。
「これだけあれば良いだろ。」武が言う。
「弾も十分だしな。」利哉が言う。
「なんでＭ３７があるんだよ。」勇輝が聞く。
「あれ？勇輝知らねぇのか？パトカーも止まってたぞ。」武が言う。
「そうだったのか、納得したよ。」勇輝は納得した。

「おーい、こんなのあったよ。」佐紀がそう言って何かを抱えてきた。

ゴト

「っておい！そんな乱暴にするなよ！」武が怒った。
佐紀が持ってきたものは、ＲＰＧ－７　いわゆるロケットランチャーだ。
「どこにあったんだ？」勇輝が聞く。
「戦車の中」佐紀が言う。
「これは使うときを考えなきゃならないな。」武が言う。
ロケットランチャーは２発だけあった。
すると、市役所の正面ロータリーに一台の北陸鉄道の路線バスが止まった。

体験１５　強力な武器調達（後書き）

銃の名前間違えてたらごめんなさい。

体験１６　報告（前書き）

今回は長いね。

体験１６　報告

市役所のロータリーに1台の北陸鉄道の路線バスが止まった。
「おい、みんな銃を持っとけ。」ひそひそと武が言う。
「どうしてだよ？」男子が聞く。
「考えてみろ。俺たちは野々市中学校にあった銃やたまを全部持ってきたんだぞ。さらにこの市役所の武器類もすべてパクった。（盗むこと）過激なやつらだったら、銃撃戦は避けられねぇ。」
男子は説明を難なく納得した。
「んじゃ、とにかく近づくぞ。」勇輝が言うと、勇輝達は市役所のテントに隠れながら路線バスに近づいていった。
そして、かなり近づき、声まで聞こえるようになった。

「おい、……りゃあ戦闘の……だな。」なかなか聞こえづらい。
しかし、性別が男と言うことだけわかった。
「そうだな、いった……があって……風になっ……だ？」
どうやら男子同士の会話らしい。
「わかるわけ……だろ。でも、まだここら辺にいる……だろう。ここにまだ熱い空薬莢が落ちて……な。」勇輝達は驚いた。

「どうする？バレてるぞ。」ひそひそと勇輝が言う。
「どうするもこうするも無いだろ。一気に制圧するぞ。」武が言う。
みんなもうなづいてる。
「行くぞ！」そう言って武が先人を切った。
「動くな！こっちには大量の武器があるんだ！」武がそう言って集団に向けて８９式小銃を向けている。
勇輝達も手に入れたばかりの銃を向けている。
集団は突然のことであわてふためいてる。

「手を後ろで組んで、うつ伏せになれ！」武が言う。
（そのやり方アメリカだろ）心のなかで武に勇輝が突っ込んだ。
集団は大人しくみんな手を後ろで組んで、うつ伏せになった。
しかし、一人の男子だけならない。
「……なんだ？言いたいことあるのか？」武が聞く。
すると、男子は言った。
「俺たちは別に奪う気はない。だから、銃を向けるの止めてくれねぇか？」男子は持っていたグロックを遠くに投げ捨てた。
「な？」ほらと言わんばかりの顔をしている。
「わかった。こんなことして悪かった。」武が言うと銃を向けるのをやめた。
勇輝達も向けるのをやめた。
うつ伏せになっていた人達が立った。
「んで、お前ら何なんだ？」利哉が聞く。
「何なんだ？って聞かれても……俺たちは一つのグループだけど。」
先ほどの男子が言う。
集団は全部で２０人ほどいるだろうか。
「……。」その場が無言になる。
「……その武器くれない？」女子が質問してきた。
「え？」武がキョトンとしている。
「どうしてだ？」勇輝が聞く。
「だって野々市中学校から武器をとったのあんた達でしょ。」女子が自慢げに言う。
「だから、この市役所でとった分は良いから野々市中学校で手に入れた銃を渡して。」妙に上から目線だ。
勇輝達は否定することもなく、すんなりと、野々市中学校で手に入れた銃を渡した。

「ありがとう。」先ほどの男子が言う。

「もしかして、リーダー？」勇輝が聞く。
「そうだけど。リーダーの大塚　健二（おおつか　けんじ）だけど。」健二がさりげなく自己紹介をした。
「んで、こっちが、副リーダーの篠崎　未来（しのざき　みらい）だ。」そう言って、未来を指差した。
未来が軽く一礼する。

「これまでの経緯を説明しようか。まずはそちらから。」健二が言う。
いつの間にか結成されたチームは市役所の駐車場にあるテントで話し合いをすることにした。
何人かはそれぞれの装備で警備に当たっている。
勇輝が情報を話す。
「俺たちは、まず、フォルテからマイクロバスで逃げたが、ゾンビを踏んだときの血油でタイヤがスリップして消防署横のコンビニに突っ込んでそこからは徒歩で野々市中学校に向かった。そこで、今渡した装備を体育館で手にいれた。そして、運動場に出ると、一人の女子がたっていた。……あれ、誰だった？」途中でいきなり武達に質問した。
「知らねぇよ。」武が言う。
「知るわけ無いだろ。」利哉が言う。
「……多分、岡本　夏海（おかもと　なつみ）じゃないかな。」自信なさげに佐紀が言う。
「多分そうだろ。まぁ、岡本がいきなりあり得ない速度でこっちにきて、一人殺したんだ。そして2人目と、そして、俺たちは、グラウンドに停めてあった軽トラックで中学校を脱出したんだが、岡本がおってきた。そして、大破したブルドーザーをよけて、市役所の正面に突っ込んだ。」
「あのグシャグシャになったブルドーザーか。」健二が言う。

「市役所のなかに入ったら、岡本がきた。すると、突然でかいやつが、入ってきた。」
「待って、でかいやつってなに？」未来が聞いてきた。
「ん～～～言葉で説明しにくいから後で市役所の中庭見といてくれ。」勇輝が言う。
「わかった。」未来がうなづく。
「そして、でかいやつと仲間―（？）割れを始めた。そして、俺らは、その戦いが終わってから銃をゲットしたんだよ。」
「その死体は？」健二が聞く。
「中庭と、あとは、崩れた市役所の下敷きになってる。」勇輝が答える。
「後で確認しとく。」健二が言う。

「次はそっちの番だぞ。」勇輝が言う。
「わかってる。それじゃ話すぞ。」健二が聞く。
みんなは無言でうなづく。
「すぐに俺たちの集団は、大通で路線バスを見つけて路線バスでしばらく逃げ回り、御経塚イオンに行くことにした。御経塚イオンは出入り口はすでにバリケードが作られていたが、上の立体駐車場は開いていてな、そこから俺たちは路線バスを降りて入った。」そこで、健二が言葉に詰まる。
「どうした？」勇輝聞く。
「いや、なんか行って良いのか迷ってな。」健二が聞く。
「良いって、言ってくれ。」勇輝が言う。
「それじゃ、言わしてもらう。……このゲームのプレイヤーが大量に殺されていた。」

「え！？」勇輝達は声を揃えた。

体験１６　報告（後書き）

後半は振り返りみたいでつまらなかったかな？

体験１７　作戦（前書き）

今回は色んな施設が出てきます。

体験１７　作戦

「どうゆう事だ！」武が言う。
「どうもこうもないよ。死んでたものは死んでいたんだからな。」
健二が言う。
「落ち着けって、な。」利哉が落ち着くように言う。
「……取り乱した。ごめんな。」武が言われて落ち着く。
「話を続けてくれ。」勇輝が言う。
「わかった。殺されていたのは、２４人だった。全部が銃殺だった。
しかも全部一発で仕留めている。」健二が淡々と言う。
「一発！？」武が信じられないようだ。
しかし、健二は話を進める。
「さらに、死体の持ち物である銃からすべての弾が抜かれていた。」
「……。」勇輝達は聞くことしかできない。
「そして俺たちは、御経塚イオンでは何もアイテムはゲットできず
に中学校に行った。しかし、すべての弾がそこでも捕られていた。
そしてここにきたって訳だ。」健二は説明が終わって一息ついた。

「これからはどうします？」未来が聞いてきた。
「犯人探すか？」利哉が答える。
「無理だろ。この人数では探せないだろ。」健二が言う。
「どこかに良い建物ないかな？」勇輝が聞く。
すると、先ほどの上から目線だった女子が言う。
「Ｖ１０（ヴィテン）ののいちは？」
Ｖ１０ののいちとは、簡単に言うとスポーツジムだが、一階や二階
には接骨院や、英会話教室、レストランまである複合施設だ。
「でも流石に柵があるとはいえ、全部が柵で囲まれているわけでは
無いぞ。」健二が冷静に言う。
「……。」そのまま黙り込んでしまった。

「それなら、工大はどうだ？」勇輝が言う。
工大は、略された言い方で、正式には「金沢工業大学」だ。金沢なのに野々市の中にある。さらに、金沢工業大学の敷地内には１１階建ての図書館「金沢工業大学ライブラリーセンター」がある。
「そうだな。あそこならぐるっと柵にか困れているしな。そこにするか。」健二が言う。
「これから作戦を考えるぞ。」健二が言う。
「何の？」未来が聞いてきた。
「工大に行くまでのだ。」健二が当たり前のように言う。

「いいか、作戦を話すぞ。」健二が言う。
「まず最初に、すべての車両を金沢工業大学に向かわせる。一つの車両に一人な。そして付いたら信号弾で俺たちに合図を送る。その間、車両に積んである機関銃で出来る限りのゾンビを排除してくれ。その間に俺たちは路線バスで金沢工業大学に向かう。合流したら、敷地内のゾンビ一掃の取りかかる。それで良いな。それと、無線を車両に乗る一人に一つずつ渡す。それと、俺たちも一つな。」健二が作戦を話した。
そして、男子の何名かが自衛隊の車両に乗る。
エンジンがかかる。

そして、車両が野々市市役所から出ていく。
それを、勇輝達は見ていた。

体験１７　作戦（後書き）

説明に出来れば突っ込まないで下さい。

誤字脱字がありましたらすいません。

体験１８　冗談が真実に（前書き）

更新する日がバラバラだね。

体験１８　冗談が真実に

装甲車などの自衛隊車両が出発して３０分

「もうそろそろのはずなんだが。」健二が市役所の駐車場の時計を見た。

「ゾンビにてこずってんじゃない？」勇輝が言う。

「それはないだろ。多分……」健二が言う。

すると、

シュバッ

工業大学方面に白い物が光った。

「ついにきたか、よし、行くぞ！」健二が嬉しそうに言う。

健二達が乗ってきた路線バスに武器を積み込む。

「ゾンビ出てこねぇな。なんでだ？」武が聞く。

「まだ、あいつらのどっちかが生きてるとか？」勇輝が冗談っぽくいう。

「止めてくれよ～縁起でもない。」笑いながら会話をしている。

武器の積み込みがあらかた終わった。

「これで出発ね。」佐紀が言う。

「そうね。」未来も言う。

「バスは田中一（勇輝）、お前が運転してくれ。」健二が頼む。

「良いけど。」すんなりとＯＫを勇輝は出した。

「また事故るーー」事故るぞと言おうとした利哉に勇輝がチョップを食らわした。

「……まぁ、田中で決まりだな。」健二が路線バスに乗り込む。
全員が乗った。
「俺ちょっと誰か残ってないか確認してくる。」勇輝は運転席に乗る前に言った。
「それなら、武器もあったら持ってきてくれ。」ついでにと言わんばかり健二が勇輝に頼む。
「わーかった。」勇輝はため息をつきながら言う。

勇輝は市役所に入る。
「誰もいませんか？」誰も応答はしない。
「置いてくぞ！」誰も応答はしない。
「戻るか。」そう言って戻ろうとしたとき、

カラ……カラ

勇輝はとっさに音のした方をみる。
市役所の向こう側の建物の瓦礫には岡本が埋まっているはずだった。

ズボッ
走った。
瓦礫の中から手が出てきた。
「ヤバい！」そう言い、勇輝は路線バスに　走って向かった。
路線バスに乗る。
「岡本が生き返りやがった！」勇輝が叫ぶ。
「工大に行くのは中止だ！なんとしてでも工大に入るまでに倒すぞ！」健二が言う。
そして、無線機を取りだし、喋り始めた。
「今からそっちに行くのは時間がかかる。なんとか持ちこたえてくれ。」
『了解！』返事が帰ってくる。

そして、無線機をしまう。
「いいか田中、今から新庄イオンに向かってくれ。工大には向かうな。」健二が言う。
「わかっ――――」たと、勇輝が言おうとしたとき、

一人の男子が、言う。
「来やがった！」
「バスを出せ！」健二が言う。
その声と同時に勇輝は路線バスのアクセルを踏んだ。

体験１８　冗談が真実に（後書き）

ここまで読んでくれている人ありがとうございました。
まだ続けていくので期待下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2670y/

キール

2011年12月7日02時54分発行